



「倭漢三才図会」巻38にみえる「シイ」（尾崎家文書（防府）237）

文書館 もんじょかん 動物記



書庫に棲む動物たち

15

丑

うし

牛を殺す怪獣「シイ」

牛は農民にとって大切な労働力であり、家族のように養いました。牛の安全は人々の重大な関心事でした。

寛文3年（1663）、萩の界隈に「シイ」とよばれる、狸に似た獣がたくさん現れ、人々が捕らえ殺したといい、「このシイ牛を殺すといふは非か」と、シイが牛を殺すという伝承を持っていたことが記されています（「防長故事年表」（写真右）・「延宝見聞録」（裏面参照））。

また、岩国領の物産や生物を書き上げた「吉川左京領内産物並方言」（元文3年＝1738カ）でも「シイ牛ウチトモ（云う）」とあり、シイが牛を殺すという伝承をその名に留めています。

また、岩国領の物産や生物を書き上げた「吉川左京領内産物並方言」（元文3年＝1738カ）でも「シイ牛ウチトモ（云う）」とあり、シイが牛を殺すという伝承をその名に留めています。

「シイ」が具体的に何の動物をさすのかは不明ですが、江戸時代後半に至っても人々に恐れられ、「防長風土注進案」前大津宰判俵山村の風俗の項には、「五月五日より八月朔日までの間、他村より牛を牽来り候事決て仕らす、往古より当村の風俗にて御

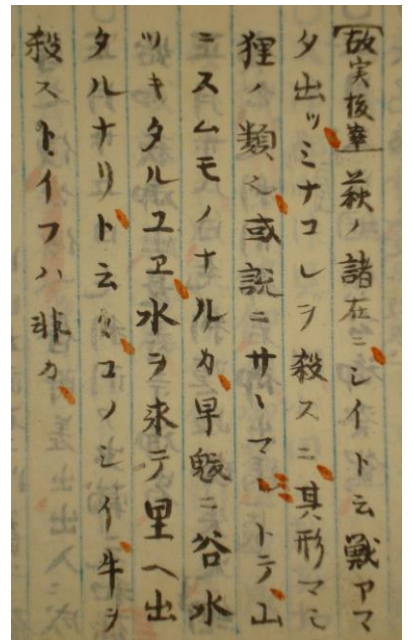
座候、他村の牛を引入候へば、シイと申獣付来り牛を喰殺し、或は天災を招由申伝」として、他村の牛が村を通り抜けることすら堅く禁じていました。

また、同宰判深河村ではシイの姿はしだいに伝説化し、盆の柱松（牛燈）行事と関連づけて語られており、水中から出現する片目の怪獣になっています。

「（七月）七日より盆中夜々、牛灯とて川原又は野中へ童部共群り、家々にて麦藁を貰ひ来り、二間余の竿頭へ麦藁にて酸漿形のを調へつけほうつきと申て是を建、麦藁竹などの松明へ火を附、是を竿頭のほうづきへ投込戯れ候、此戯れなき年は水中より片目（シイ）と云もの出候て牛多く死と申伝候、家々麦藁を吝み出し不申もの八牛必死と申、大概望みに任せ候」

山陽諸国で牛を追うかけ声に「シイ、シイ」というのは、牛がシイを恐れるからだという伝えもあります。

「シイ」の出現

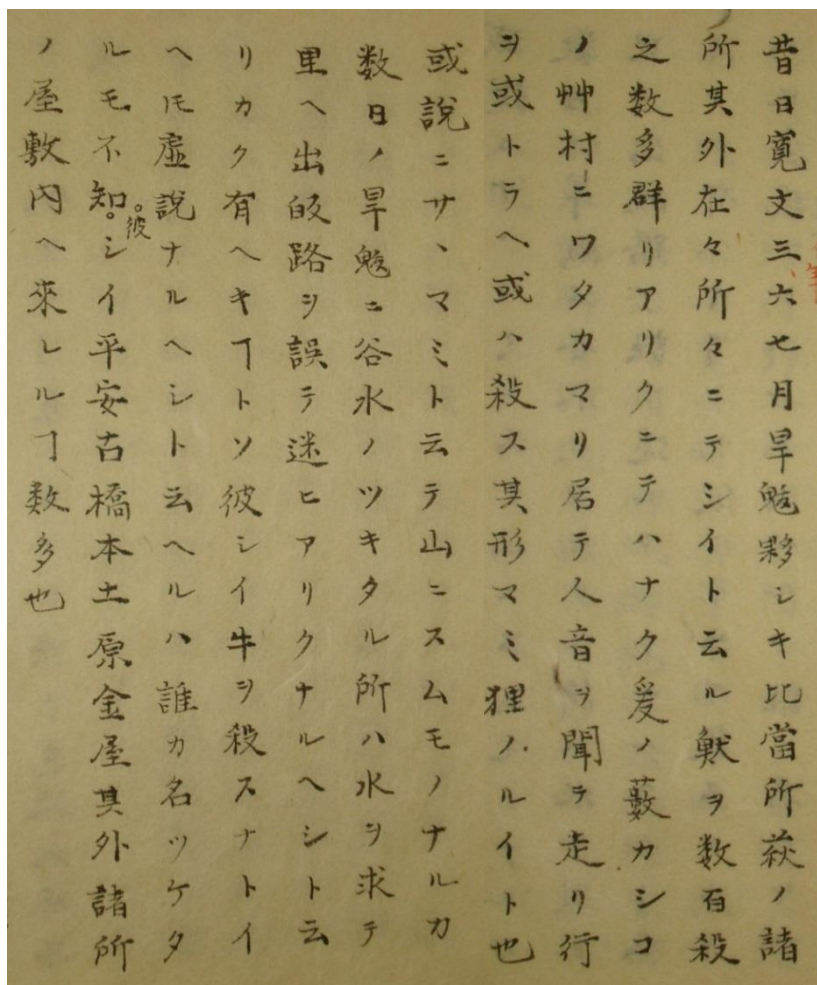


寛文3（1663）年の夏、「シイ」の出現を具体的につげる「防長故事年表」。「其形マミ狸ノ類也」と記しています。

（県庁伝来旧藩記録 1082）

シイに関する資料

文書館資料	防長故事年表 一	県庁伝来旧藩記録 1082
	延宝見聞録（下写真）	県史編纂所史料 104
	舟木産物名寄帳	毛利家文庫 34 産業 15
	吉川左京領内産物並方言	毛利家文庫 34 産業 19
	両国本草	一般郷土史料 373
	防長風土注進案 吉田宰判厚保村	「熊野大権現」の項 刊本 P364
	防長風土注進案 前大津宰判深河村	「風俗」の項
	防長風土注進案 前大津宰判俵山村	「風俗」の項
	「倭漢三才図会」巻38「黒青」の項	尾崎家文書（防府）237
事典類・本草・随筆	しい<青>	日本国語大辞典（小学館）
	志い	和訓栞（谷川士清）
	青（しい）	筑前国続風土記 29（貝原益軒）
	黒青（しい）	大和本草 16（貝原益軒）
	黒青（しい）	和漢三才図絵（寺島良安）
	随観写真（東京国立博物館蔵）「志乙」	後藤光生（梨春）
	北窓瑣談（日本随筆大成第2期15巻）	橘春暉
	齊諧俗談（日本随筆大成第1期19巻）	大拙東華
	塩尻（日本随筆大成第3期15巻）	天野信景



「延宝見聞録」（県史編纂所史料 104）